

総合支援学校 高等部
工業 情報技術基礎

キーワード I P t a l kの活用
コミュニケーション支援

「携帯電話と情報モラル」

1 単元の学習

単元目標

インターネットや携帯電話などを安全に使う知識、技術を身に付けさせる。
情報の収集・発信・自己責任・プライバシーの保護について理解させる。
自分の意見を文章にし、発表させる。

対応する学習指導要領の内容

教科・領域等	内容等
工業「情報技術基礎」 (知的障害の生徒を教育する場合)	・情報のモラルと管理 ・データ通信とネットワーク
自立活動 (コミュニケーション)	・文章によるコミュニケーション ・正しい日本語表記

2 指導略案

単元指導計画

指導内容等	時間
インターネットと情報発信	1時間
携帯電話と情報モラル1	1時間
携帯電話と情報モラル2	(本時) 1時間
情報の管理	1時間

本時の目標と展開

【目標】

情報支援ソフトウェア「I P t a l k」を使い、チャットで授業に参加する。
ICT機器の活用という新たなコミュニケーション手段を用いて、意見交換を行う。
携帯電話が便利なコミュニケーションツールになってきているが、それに伴い、悪質なWebサイト、メールによるトラブル、個人情報流出、通信費用の高額化などの様々な問題に巻き込まれない携帯電話の利用の仕方について考えさせる。

【展開】

学習活動	教師の働きかけと指導上の留意点(情報機器・教材の活用)
携帯電話の利用方法を発表する。	生徒の発表内容をプレゼンテーションソフトウェアで作成し、プロジェクターで投影する。 I P t a l kを使い発表させる。 ・単語だけの伝達でなく、文書表現になるように気をつける。
情報モラル教材を見て問題になる行為を発表する。	プロジェクトを使い、情報モラル教材を見せる。 I P t a l kを使い発表させる。 ・情報の取扱いにはルールやマナーがあること、無意識であっても問題となる行為があることを確認させる。 ・トラブルにあったら、どうするかをはっきり説明する。
情報モラル教材を見て責任がどちらにあるか考え発表する。	I P t a l kを使いチャットで自分の意見を発表させる。 ・生徒の意見が同じ場合には、教師が反対の立場から討論に参加する。 ・結論を誘導するような討論にならないようにする。
公的な相談機関を検索サイトで調べる。	相談できる公的機関を検索サイトで調べさせる。 ・自分が住んでいる市町村の名称を検索で使わせる。

3 展開の実際

【ICT機器活用の意欲の向上】

高等部産業情報科には、聴覚障害の生徒が在籍しており、校内では、手話や視聴覚機器を活用して教師や生徒間でコミュニケーションを図っている。しかし、校外や卒業後の生活において、他者とのコミュニケーションは容易ではない。このため、本単元の学習などを通して、視聴覚機器や情報通信機器を活用して、他者と積極的にコミュニケーションを図る姿勢を身に付けてほしいと願っている。

また、情報機器の使用を積極的に勧め、財団法人全国商業高等学校協会が主催するワープロ実務検定等の各種資格取得にも取り組ませたい。

【チャットソフトウェアの活用】

教師の手話技術が未熟で、授業内容を十分説明することができないため、難しい内容については、筆談で説明をしている。しかし、筆談は時間を要する上に、単語によるやり取りが中心となるため、コンピュータのチャットを活用し、複雑な内容を双方向でやり取りする授業を試みた。

チャットを使った最初の授業では、生徒は興味を示し、熱心に取り組み、それまでになく活発なやり取りが見られた。しかし、気が付くと教室内の全員が無言でディスプレイを見つめ、ひたすらキーボードを叩き、授業が終了してしまった。このことは、本時の指導内容が多かったことが要因の一つだと考えられる。

生徒がじっくり考える時間や、コンピュータ入力を行う時間を十分に確保するとともに、必要に応じて生徒相互が討論できるような配慮が必要であった。

4 情報機器等の活用の工夫

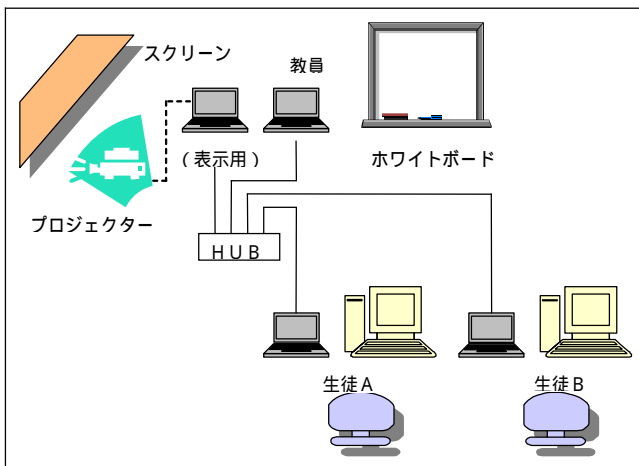
【学習環境】

プロジェクタを使い、プレゼンテーションソフトウェアで授業を進める。

情報支援に使われる「IPtalk」を使う。

LANを利用したチャットで、互いの意見をプロジェクタに表示し、全員で見ることができるようにする。

インターネットに接続したコンピュータを準備し、調べ学習を行う。



IPtalk

聴覚障害者への情報支援の一つの方法である要約筆記（文字による通訳）をコンピュータで行うソフトウェアで、インターネットのサイトから無償でダウンロードできる。

LANで接続された複数台のコンピュータを用いて、話し手の声を即時要約しながら連携して入力するために利用され、コンピュータを使った要約筆記者の多くが本ソフトウェアを活用している。

最大9台までのコンピュータをつないで、同時に入力できるので、チャットソフトウェアとしても利用できる。

5 情報機器等の活用の効果 < : 効果 : 課題 >

【チャット活用の効果と課題】

「手話」よりも複雑な表現が可能となり、特に専門分野の説明やカタカナ表記が容易に行える。

「手話」は一連の動作であり、見落とす可能性もあるが、このシステムでは、スクリーン上に文字を表示しておくことができる。

生徒の文章表現が不適切であったり、日本語表記に誤りがあった場合、その場で指導できる。

チャットは、複数の者が同時に参加できるので、発表者の順番、誰に対して意見を述べているのかが分かるようなルールをあらかじめ決めておく必要がある。

コンピュータ入力に集中すると、相互の表情を見る機会が減少するので、机の向きやスクリーンの位置など、互いに表情が見えるような工夫が必要である。

授業だけでなく、携帯電話をはじめとした文字によるコミュニケーションの際に、文字や文章に込められた感情について考える機会を多く設定することが必要である。